



手

中村俊定文庫
文庫 18
576





88

甲斐の根ふ一隠子あり東有ふ草の葉峰をまき
 其影や福久し不二井の道くもま日中しきかきと家
 ちうしうりー今い昔字の曆子のま梅馬の志とま
 一塚のまー眼着ふか久前坡三日青根を老ゆく
 形密とまー梅童とよま老牙健しー天明子の
 一糸の字くゆま入き糸と何ら伝流表吉の住人
 一くく一睦みまれ河友玉市も瀧中く生流御階の外
 亦ら車とく一帯くくわいの節ふいおた行くも流るいへ



照しうりくは老人いんけよりも横寝の解ふ
まのちく思ひ思のくもふりういふはあはれ
後馬とてまをりし業の枕の下より一冊の辞世あり
あはれいふ思ひ思ひとていふはういふあはれ
例しうりくは老人いんけよりも横寝の解ふ
りしうりくは老人いんけよりも横寝の解ふ
あ見をいふ思ひ思ひとていふはういふあはれ
一冊とて後馬とてまをりし業の枕の下より一冊の辞世あり
いんけよりも横寝の解ふ

定よりくは老人いんけよりも横寝の解ふ
あ見をいふ思ひ思ひとていふはういふあはれ
一冊とて後馬とてまをりし業の枕の下より一冊の辞世あり
いんけよりも横寝の解ふ

天明元丑年



平仙

譯世の一句と種々

一巻と後二のく

雪前ふ踏 踏い

散れぬとやく見定く花名旅

浄山房梅童

まふわのまき君重た神

梅賦

川水入音のすゆれを介す

寛山

園いむら 雲の稀ふ明る

東平

地原乃知工舞月のまかけ

松磯

高くゆく身もあくの秋

藤壽

日んわすし音多ら終ん宵馬山

儀石

まひかちり雪く牽良くつと

如醉

まつら車ゆーいあきあはるるん

笛吹

青田臥 きてくる待りうー

梅牛

此岸を越すと六丁一里をす

一醉

不自ゆまらしふ病おあはれ

春瓜

心ちうき達磨を何ふもなまるあま

竹我

荒了ー本天冬乃海月

如想

連下字うみ降きる古川らら

松吹

掃ちきりきり津車のそ

永秋

我うあうーう字のまーさあら首

一古

社りふ碓く後々 兼早

玉枝

二
春平や、予獲くー不節ー

墨之

は連引ととく神代書

桃閣

子考ーハ何と用ひくー口こも

兔丸

恋ふ乱もーお徳とままや

閑阜

衣ふ音の強くわうああのみと

枚原

お乃とれとまー白く降

翠象

金山い何乃かのー休うら

和閑

むとくーききぬ 鱧つけー

民光

えーおあゆーゆ津浪人

具半

登ふふ津うまー寺の用ん

杉舎

さ満くふ名のかつとも月一

吟登

うあふあふかーの養妻の花さく

兔坪

筒力庵の純子着む峠ーとも

原兔

半ふぬー鉄玄 氏

孝路

原を木の中へつてさう見之るゝ驢一匹
 動くともさうく西へ行く雪
 此後の信をらも花もさへ咲き
 日向も今わ 百有る草

冬遊悼

梅あゝ今や 蝶や夢や 雪もぬ
 侍とあひやし 今一とぬる雪
 雪一入 鳥うら 庭一わらふ
 梅園わさゝく 菊しの 春もさ

根とくも 帰ぬ 旅も 都一うれ
 春や 春や 春や 幻一了 中や 郭一
 行く人とも 終見はく さら 別も 霜
 霧消乃や ともり 乃と 山さ 大
 とろくとも 霧も 悟る 枕の 酒
 花と 夢の 人夢一 じ乃 百味も
 やや 乃と 香も 折原も 梅の 乃れ
 我より 乃と 先へ 乃と けく 蛙も
 川河の 回日 神ハ 傳へ 乃と 春乃 乃

白鹿 草履 菖仙 馬羽 寛山 如志 松酸 吟齋

東平 友壽 用阜 竹我 草履 磯乙 笛吹 永秋 兔丸

残れ居のくれハ家一寺庵られ
 抱く水々仲 残れ去居了な
 此黄昏ハ棚引やわ地乃くれ
 能のくれまゝハ日向の雀リ南
 見跡一々ハ毛悟りハ花さうと
 あうハまの毛寝ももろ一あも常
 笑残才梢のくれ毛記念了奈
 限了身花ふふすわ春の面
 日板り水定さう一啼一蛙

柑 之
 翠 之
 如 醉
 梅 牛
 一 碎
 春 瓜
 玉 板
 一 古

花音一々ハ向はうハ残れ将くれ
 万むハ付あえの跡れを命了な
 あうハたふ春よの花や春の他
 おしはれは夕々まもあ兼七日
 定法の文字跡一々ハ帰一序
 花乃香ふむまゝくわよハカ春暮消
 暮くハ新まの春残わ花音鐘
 伝名書ハあえの残ハ春一了南
 一々ハ毛春む杖さう一春の雪

麥 踏
 松 吹
 松 舎
 枝 派
 兔 城
 原 兔
 白 鹿
 和 潤
 氏 光

現おとく乾きくしゆ干き甚日よ

吳半

果しちあまは見え送つた花の

友仙

柳見よきのみを文と記念うれ

馬明

月虫多ふとちまも世のぬれらる

梅賦

老翁常ふつて悼の句多し

お新しう東四時の吟とま向きん

草葉の語く庭に柳と甘き

思ひ出く白地の句とわが莊

有明くおれとちまわお不月

梅賦

吾うふわ寄る時花をぬる

柳平

最うはくうろも白くくれさう

梅明

和草や是も柳花の内の

和香

盗人ままふ人言ちり

梅友

入おま縁柳りて古用干

松山

お新しさい内うらに花田植

魚仙

川流ふろろ流ふや夕事

長富

菖毛者の長尾おま

梅民

名月や画の席ちと雨をら上

長古

の年

三層多抱けうとくや岸一巻も
町了人の先へ居直り暑了れ
行船わ多きく青女唐の命

わ等

儀童
梅茂
元夕

義一き招く種はわ藤巻るれ
名月わ放きぬやア一層の命
日寧一あく車くく唐のわ女市一舞
京、虫、やの子唐わ初くく

馬明
巻丸
麥賦
寛山

まくと京へ橋と巻きくかきけく
山川もや、子課きくま月つ
見送了る唐流わ蛙了れ
いさ暮のわアソわくわ 董草
籠あわ付残れ床は 羅
寒すあ 百くくまきう 柳の唐
橋む人 有るあま家 一わ物犯の花
柳の思も思日虫す口わはくく
青くと好いけとま 一口うま 雷

岩等

藤仙
松流
葉行
左唐
竹夫
松扇
文秀
伴秀
秋江

今うゝい許了る回しはくく

竹里

菊の日は花をきくは常の事

栞閣

花をくくすも了るは日

栞来

栞花は菊の根分るは向了れ

栞岳

栞花は羊の啼き種をあら

栞秀

後堂の付高し夢をあら

栞酸

草くを名けきく庵乃るは

専鏡

栞引わすは五ふの春花をあら

染有

見かくるは交指し高はく

予袖

水白わき毛未高不二地

仙吟

玉とくまは乃おまわりの

予具

自らも惜まじ春をあら

溪十

夕うゝは橋のふれのあら

仙路

涅槃をわ物干し高は餅をあら

翠籟

かゝるはくわく人わくの自

永秋

物の言はくはくはくはくはく

閑阜

上堂筆

新

出時

野原のわさび見付く岸は
山もぬれ先る白の濃
羊の川這ふまゝの独
ぬす人の我を打つ新橋
草臥を誰か後へまゝ菊

呉市
凍架
民光
亀山
書之

菰ちいと見よ習ぬ一葉
春るわ越語ハ土乃
雨亭ぬ里よいおし
紅毛が

丁之
兔城
呉行

里ハ少見の提きくし
早し女の音の上り
下り嵐 赤膚くわと
冥きま

麥鋪
破印
樹亭

園伽楠尔動ぬ影わ
木免ハ其のあつる
梅のふれ

梅光
草衣

旅カウ字ノ音聞ハ
蝶ハ抱フ不帰ラ
飛わぬ乃白

一之
那乙
潤

四日事場

八十一

お月ハハハ五七ヨアハハハ

先老の廟子訪く右年のまの

吟と思ふ出く糸の匂と

まいゆらゆらと向侍

清山房

中よりと鼓く鐘許ハ何ハハハ

せぬと朝あはく夏のおの月

漸くと波れ流流ア神さらく

積すゆらとさるる古集集集

折節か名 時ふ修即毛半也

兔巾

寛山

平園

舞巾

昔かきたるを又 清く出す

洗下

冬拾音

字川まらして 庭葵あり塚乃道

見定ると果るすれ 苔のくれ

定ちわきよ ぬま白の葉柳草

亦た日や机ア 夢アの一扉ア

啼ぬ日ハ 待毛淋ハ ねんこ冬

兔巾

舞巾

洗下

平園

寛山

四季混雜

正しく其の音 春ハ也 春ハのる

未木
巳同

八十一

水仙や青き草のついでに
まのよしの籬の物ゝ梅の香
をよ〜ぬ風おき〜り花卯木
味あし〜子品をたふ〜子
名月や木の河舟のり〜り
折まひやうねり時移る〜り
筆や捨子の葉〜り仲〜り
梢う〜生て見をき〜り
よまきよの石を白〜り

里泉
思録
麥路
真繁
草路
来山
賦悦
雨清
南井

朝清色水〜第や〜り
ね〜枝の羽織り〜り
名をす。山吹〜り
花さ〜り
庭〜るを〜り
経事〜り
起〜り

批産
長扶
拙産
愚童
梅酸
原兔

惠不二の〜り
お〜り

如
如
如

新宅

字く日美や月い夕部うさるる長
形小様山大も色まきく形子のし命
あささささの指の積ぬ糸一うれ
銀帯も木の下つ一糸の長梨了ふ
川越く世間いふまじりの清水が
ゆきゆき改まらう一わすれのとこま
草草のやう、清くわおあしを
けぬまきくふす耐わし一のそれ
いぬい出す上へまき、わあは頂禱

梅實 の年
鬱松 門者
吹 松野辰
鳥 松野辰
柳 松野辰
梅 松野辰
調 東野
雨 東野
鳥橋

自らの間に隈おき一糸一糸から月
初をや清く一糸一糸 至是く糸
夕くまの糸子か帯わ厚の糸
下戸の糸思すすぬく糸糸糸が
杉表の下小杉糸わらん、糸
なう一高きふれ深み糸糸糸糸
角力糸の昔 鳴一のお糸糸糸
木の糸糸糸く 繫糸糸糸糸糸糸

現計 千早寺
初 千早寺
洗 千早寺
玉 同報
波 同報
山 同報
如 一之尾
西 一之尾
洞 谷田
隣 谷田

己う葉とわのの掃きとあり。柳
おほく〜田舎〜春経下り

柳塚

如洗

土塔

梅梢

金四

子おれ時見勝入入橋のま

急来

休む〜毛平砂、下りた田植了れ

杉舎

と〜〜〜牛毛尻目やゆ節昇

素仙

人毎、移入欠やけ。れる

兔角

〜〜〜扇の時也節〜

扇 本都塚

花〜〜〜ぬ月ハ〜〜安ん極了と

巾 東下 去

〜〜〜〜〜人多〜山〜
〜〜〜〜人〜〜〜
田の水を漕る。あま〜
〜〜〜影を〜
おの〜
一筋〜
あま〜
渺〜

黒駒

吟登

利登

里棠

我背

亀明

管志

眠之

和乙

福車後水の清中捨く郭公 吟壽
山花

熊手居節の機姫よりいへし

や外の雲は満つ其仲の在るや

可い之言

あつくとおれあそむ種おろし 楚雀

お寺のまじりあそぶ人の思ふまじり

まじりくしあそぶくおれ合をよまじ

利権むとけりのちよあつてふ
利おきぬ悦合けつうう芋糖坊と
あつてふまじりも記念とありん

嬉しさい梅お直さきとあ芋川屋 芋糖坊海山

今こつ悟り秋お直さき 麥賦

影高く軒踏しめくあ日入し 下三

音おろこ地の夜只松子木 梅賦

清純まの船子海しそ言きく 平

あつて用多ね芋あつて 梅明

ウ

金会なく牡丹下葉君より賦

山

春の世もくは八原君寮

春賦

吹連くく夏は深き馬印し

春平

春の山より日の移る風

梅賦

其猶此稍之れ華君 伝

梅明

春の朝下 春の春の身

羊

各拾香

此の干後下 沸 現 下 至

梅賦

記念とく手打れ毛危の梅物ハ

柳平

尋路も今や初春花乃奥

梅明

形より一掃の毛より花乃凡

春賦

そくそつ 洞仙子影返り花の旅

下山

四季混雜

庚子年辰辰 壬子年 筆書思

松 賦

群 言 々 々 梅の華いれ下之夜

中路

草の戸と守り下 行わきりく 春

梅 青

字く白装の梅いりく 上 帝 賦

春 連

花あくく 何と詠む 春 春 暮

松 意

理片

中尾

新

公海の清海にうきと 春をを

梅長

尾津の神をまじりむねや市井

梅壽

日きり火や小舟を岸を沿

刺盛

夢の夢ハそきり枯やうれ

栗原 里童

永き口や伝のぬき見を糸の内

黒仙

淡空の梢子残れ 雪かき

東平

角見もいぬあこしきり鹿の角

万カ 磯乙

丸の姿拾い下りぬきりくそのか

一碎

糸石や過もちうのら毛繕しる

角吹

糸石や柄杓つぬきり提くる

角川

龍を毛下戸と見りぬゆ干か

藤波

糸々々糸々々糸々々糸々々

糸吹

糸々々糸々々糸々々糸々々

糸吹

地了物の影もふくまきり織り

兔文

糸のふれやまけ 枝折も糸の馬連

桔梗

糸のふれや糸の糸の人を糸の糸

如考

晩鐘をきく小鐘をたもみりか
杉山と名をたぬきり新酒ふ
那のまふ名をとがり合飲のま

松 寺
山
瓜

掃人背中へ酒を落葉うれ
紙尺の影惜みり春あは櫻
日さうりお目もちくく花乃雪
冷巾伝子麻もー思日了南
影くく影けり水や梅のそ奈

竹 我
荻 可
吟 朝
里 梁
菰 宇

一筋了るる運ふや急の傍
一筋のたなきぬしぬきぬ
耳は洗ふ勝るら産たふ多うれ
おとこい君 人ふ逢きり山九う

竹 倉
涼 雨
松 都
藤 書

おまひ虫ーまひ出た車ーや蝶の夏
根了る術の時毛花尺んやあは棟
掃よをくく山くーさうりくまの雪
飲くあはぬ流るすり清水了ち

落合
周 路
魚 一
松 居
菰 牛

晩鐘の初る響くや入れば山
霧のぬの路たのまゝや福前子
反橋の掃除を傳ふ声うれ
見定と山くもあゝ氷室守
ふま物あゝもふや夕暮る美

明石
陸川
香山
三市塔
玉枝
一古

あゝの家の子聲あゝ暮る雪の中
名日や碑くく静かまを中上
雪火くく佛跡あゝ想ふか

上州平井
一芳
行州上田
仙松
小原
素蘭

庭前へ風の多かりや梅乃く水
子く柳水周ハ明く終る所

嵐水
白鹿

常盤の夜ハ砂々々鹿の心
香ハ今子 在るる 梅のこころ
おーめも帰るぬ柳香の口口了直
伍の世の名残を おーわ花の雪

北都塔
育梅
評
都雲
吟水

草の庵
草の庵
乙才

草の庵
乙才

花の香もつた 影く名 下れ

甲陽

素流

そは吟

津山屋より和山の名を賜へり
紅部の信長子其後馬より毛連の
物と柳とつきの吟と松と松香と

福原わや 於て是を 山をらと 津山屋

付かのいれ 松をら 和山

了曲尺ふ大工の 子あり 牧牛

氣輕く 滯きよ 芦角

季分の 駒了 ありの月毛 利調

松の あり あり 富乙

秋より 世を 交り 幸あり 都泉

悲 懐了 念ふ おもひ 乃 君 南金

物 訪 与 所 目 暮 口の 内 あり 轅路

心 川 を 限りの 沈子 さう 和香

おまうら 心事の 案 け 辭れ 舟 仙乙

不二 折 糸 影の 残れ 青柳 素人

棕花

影を 深く ね 岡 山の ぬ 義より 利調
人 又 命 子 帰 高 け 千 子

了無あしく啼一 ちるまおつとちる

和空

空 値 ちるま向とちるまわ ちるま

芦角

ちりま 塚 ちるま向わ 白い

鳥乙

取 ちるま 塚 ちるま向わ ちるま

素人

あ 残 ちるま ちるま向わ ちるま

他乙

思 ちるま ちるま向わ ちるま

牧牛

白雪思難

地 ちるま 影 ちるま向わ ちるま

和雪

地 ちるま 影 ちるま向わ ちるま

牧牛

百姓の服ふいよ equal 給 ちるま

利酒

ちるま ちるま ちるま ちるま

芦角

大川 ちるま ちるま ちるま

他乙

曲 ちるま ちるま ちるま

素人

梅 ちるま ちるま ちるま

和雪

浄山層母友之吟

梅 ちるま ちるま ちるま

湖蓮

梅 ちるま ちるま ちるま

仲亮

西 ちるま ちるま ちるま

亭午

七巻山

不和

相のまゝの如くぬえおきしるその秋
秋の日の色青き入まみらうれ
紀子書簡しきし田村の
あゝ又夢り配れお寐のくれ
秋の青き川片くの時のうれ
秋の日にさしは風の暑うた
浄土の山をたふすはよきの子
来りきハ杉のまじりか樹白
おうたわ酒屋の浅く花のうら

常

湖

林

好

女

引

古人

古

杜

秋はハ行義崩さぬ百守居が
追悼のうら

之城

まゝのやわきのよを亮のま
紫より毛先ハつてくる老の夢

平橋庵

氷

瓜

口舌ハ京都文通

右引の歌おきし由すおきし
街そのまゝ葉光れ暑うた

後

秋より〜〜〜
おきし〜〜〜

おきし〜〜〜
おきし〜〜〜

文

静

境のきり、枝は門をなす、梅の乳
 花は、ちのわ、花をふ、枝と、は、
 舞、わ、車、の、ま、り、は、
 枝、の、入、り、は、
 尺、の、上、の、菊、つ、
 中、の、島、の、低、な、青、田、了、奈
 半、天、尔、日、五、日、絶、了、帰、了、
 百、重
 具、前
 且、中
 花、六
 已、草
 止、弦
 為、の、廣

松本守拙先生之

御所望、依之才呈ス

明治三十九年十月

峽東祝村

渡色武右



海老色
立